



## 年始特別開館のご案内

小杉放菴記念日光美術館では、1月1日(木)～4日(日)、年始特別開館します。現在開催中の展覧会「漫画を考へるちばてつや原画展」(2月1日まで)を、この機会にぜひご覧ください。

開館時間：午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日：毎週月曜日(祝日のときは翌日)

※年始休館1月5日(月)～7日(水)

入館料：一般…700(300)円、大学・高校生…500(200)円、小・中学生…無料

※( )内は市民割引券を利用した際の料金です。

### ▶温かい甘酒を振る舞います

新年を祝い、ご来館の皆さんに、小杉放菴がこよなく愛した青森の銘酒「桃川」の酒粕から作った甘酒を無料でサービスします。初詣にお出かけの際には、お気軽にお立ち寄りください。

とき：1月1日(木)・2日(金) 午前10時から

ところ：美術館入口(当日分がなくなり次第終了)



KOSUGI HOAN  
MUSEUM OF ART,  
NIKKO



小杉放菴記念日光美術館

## 日光の

# 伝統工芸

traditional crafts of nikko

## ④ 今市の挽物

(いまいちのひきもの)



### 今市の挽物とは

今市の挽物とは、主にクワやトチノキ、ケヤキなどを原材料とし、ろくろを使って削り出して作る器のことで、湯呑みや菓子器、お椀などがあります。複雑な形の急須なども、注ぎ口や取っ手を別で作って繋ぎ合わせるのではなく、全て一片の木材から削り出します。そのため、挽物の制作には、市販の工具ではなく、改良を重ねた数十種に及ぶ自作の工具を使います。製品の形や大きさなどに合わせて、それらの工具を使い分けながら加工します。削り出した後は、仕上げとして塗りをを行います。塗りの基本は生漆ですが、材料や製品の用途に合わせて塗料を使い分けします。

### 今市の挽物の歴史

今市の挽物は、大正時代に作られるようになったといわれています。戦後になると、それまで個々に活動していた木工職人が、今市漆器木工組合を立ち上げて技術の研さんに励みました。

今市の挽物は、他の木工品と同様に材料の狂いを修正するための養生期間が必要です。原材料の買い付けから製品としての完成まで、短いもので1年、黒柿のような特殊なものでは数年を要します。この黒柿とは、柿の木の古木のうち、中心に近い部分に墨で書いたような黒い紋様が入ったものをいい、まれにしか手に入らないので貴重です。※右の写真の手前左側、茶たたくに使われているのが黒柿です。

### 今市の挽物の現在

伝統の湯呑みや菓子器などの製作のほか、海外から輸入される大量消耗品との差別化を図るため、茶道具など趣味の嗜好品の制作にも力を入れていきます。しかし、短期間で習得できる技術ではないため、後継者の育成に苦労している現状があります。

その一方で、最近では、祭りに使用される屋台の車輪製作を依頼されるなど、挽物職人の技術の高さが、ほかの分野からも評価されています。

くわしくは

今市ロク口会

鈴木正行

倉ヶ崎123

☎(21)0781



traditional crafts of nikko

## 日光市の文化財

22

### 日光市指定文化財 焼加羅の碑



種別 史跡  
指定年月日 昭和49年6月6日  
【旧日光市指定】  
所在地 日光市花石町  
(花石神社境内)

焼加羅の碑は、延宝三(一六七五)年に梶定良が愛馬「焼加羅」のために建てたものです。碑には、愛馬をたてる内容が刻まれており、定良がかわいがっていた様子を知ることができます。

定良は、早くから三代將軍徳川家光に任せ、側近として信任が厚かったといわれています。慶安四(一六五三)年の家光没後は、大猷院廟定番(家光の霊廟の番を命じられて日光に移り、日光山の管理や庶政を行いました。定良は、日光に来てから亡くなるまでの四七年間、一日も欠かさず大猷院を拝したと伝えられ、その忠誠心の高さがうかがわれます。寛文の稲荷川の大水害(一六六二年)や、山内や西町など合計七六一軒が焼失した貞享の大火(一六六四年)の際には、地元の救済に尽くし、後世まで「梶さま」と慕われました。

焼加羅の碑は、定良の愛馬に対する思いを示す資料であり、また、その人柄を今にしのばせています。

